

会派愛川の新時代 南房総市行政視察報告書

日 時	令和 7 年 2 月 6 日(木) 12:00~15:00	
視察先	南房総市立富山学園	
応対者	三幣貞夫 教育長 林明正 教育委員会参事 井野秀文 教育委員会総務課長 袴田晃宏 富山学園 学園長 宇山尚希 教育総務課 課長補佐 事務局 書記	
テーマ	保幼小中一貫教育について	
【事業の概要】 ・子供が地域に誇りと強い思いを持ち、自己の可能性を伸ばす特色のある教育の推進。 ・「南房総に残っても、離れても、どこへ行っても通用する学力」の向上を目指す。 ・日本一おいしいごはん給食。地場産物を活用し、和食中心の献立にすることにより、子供の郷土愛の醸成を目指す。給食費無償化よりも、良質な給食の提供を意識している。		
【主な施策の内容】 平成 24 年 4 月 平群小学校と岩井小学校を統合し、南房総市立富山小学校として発足 平成 28 年 4 月 富山小学校と富山中学校による小中一貫校開校 平成 29 年 4 月 富山保育所と富山幼稚園が「富山こども園」として加わり、「富山学園」（保幼小中一貫校）完成 令和元年 新たに和田・丸山地区の 3 小学校、3 幼稚園、2 保育所と 1 中学校をひとつにし、嶺南学園を開校したことで、2 学園体制となる。 ・南房総市民の平均所得は県内 54 市町村中最下位。経済的に困窮している家庭が多い。 ・「どの子も税金を納められる存在に」をスローガンに、学力向上のため、市が予算を投入して学園内の教室を学習塾に貸したり、学校外教育サービス利用助成を行う。国が実施する全国学力状況調査とは別に、市独自の学力調査を行い、生徒毎の経年変化を調査したり、担当する教員毎の成果を観察することで、きめ細やかな把握に努めている。 ・教員の働き方改革を推進するため、週 30 コマから脱却し、5 時間授業の日を週 2, 3 日に設定する。これにより空いた時間を、教員の校内研修の時間に充てている。 ・自己肯定感などの非認知能力を育成するため、郷土愛の醸成に努める。具体的には、南総里見八犬伝を読ませたり、地場産物を活用した給食を提供したり、南房総学を展開する等といった取り組みを行う。		

富山学園前での写真

【質疑応答】

Q：保幼小中一貫校化に向けた議論が始まったときの状況は。

A：平成の大合併に小学校の再編計画が始まる。旧 7 町村毎に校数を 1/2 ずつにするという基準があった。もともと、計画を推進していく中で、当初の想定以上に少子化が加速していた。そこで、より抜本的に変えなければという意識で保幼小中一貫校化の議論が始まった。

Q：一貫校化にあたって、地域風土の違いをどう乗り越えてきたのか。

A：そもそも地域間における風土の違いは大きくなかったが、政治色をなるべく出さず、子供にとって何が最良かを純粋に議論するため、首長は市民への説明会に参加せず、教育長が対応していた。そのうえで、当時の自治会長が旧 7 町村という意識をなくし、一貫校化することに賛成してくれたことが大きな追い風となった。

Q：昔の給食はパンばかりだったが、なぜ米中心の給食にしたのか。

A：白米のほうが腹持ちすることに加え、これまでのパンは美味しくなかったから。地域で作った美味しいお米を食べさせたいという思いから、米中心に変えた。

Q：授業のコマ数の削減によって学習指導要領の標準授業時数は確保できているのか。

A：できている。なぜなら、卒業式の予行練習や、体育祭の練習等、過度に多いコマがあり、これらを削減したことによりコマ数の削減を達成したからである。

Q：1 コマあたりの授業時間を 45 分から 40 分に変えた小学校を知っている。このような取り組みは検討しているか。

A：週 1 回の校内研修が日本の教育を支えてきたという歴史があるため、そのような取り組みにも効果は期待できる。一方で、当然これによる教育水準の低下という悪影響は考慮しなければならないため、適切に効果測定をしなければならないと考えている。

【事業の効果・所感】

学校再編という観点からも合理的だったが、何よりも学力向上や食育、郷土愛の醸成といった明確な目的意識をもって教育行政・保育行政に取り組まれていることが感じられた。

【今後、愛川町にどのように反映していくのか】

令和 3 年における出生数は 185 人と、少子化の傾向は変わらない。当然、既存の学校配置を維持することは困難と思われる。一貫校化は避けられないため、地域に縛られず、最適な学校配置を考えるよう、住民の側も意識を変えていかなければならないと感じる。

他方で、学校再編だけで教員の負担や教育の充実を実現することは困難と思われる。明確な教育理念を持ち改革を進めなければ、現状における教員の過度な負担、不登校児童の増大を避けることは難しいと考える。

会派愛川の新時代「道の駅富楽里とみやま」視察報告書

日 時	令和7年2月6日(木) 15時30分～16時30分	 館内ホール・飲食スペース
視察先	千葉県南房総市 「道の駅富楽里とみやま」	
応対者	なし	
テーマ	道の駅を活用した域外集客について	
【テーマ「道の駅富楽里とみやま」の概要】 名称：富楽里とみやま(ふらりとみやま) 所在地：〒299-2214 千葉県南房総市二部 2211 電話番号：0470-57-2601 駐車場：大型 25 台、普通車 323 台、身障者 4 台 ホームページ https://www.furaritomiyama.jp/ 千葉県 14 番目の道の駅として登録され、有料道路の休憩施設である「ハイウェイオアシス富楽里」と一体で作られた。有料道路・一般道路どちらからでも利用可。		
【主な施策の内容】 国内最多タイの市内 8 つの「道の駅」のうちの一つ。ハイウェイオアシスとして、高速道路からのアクセスが良いため、道路・地域情報の収集に長けており、観光だけではなく出会いからつながりの場としての機能を重視しています。		
【事業の効果・所感】 8町村が平成の大合併をしてできた市であり、それぞれの地域性や町政・村政の中で出来上がってきた道の駅を、有機的に繋ごうとする意図がある。2023 年 6 月にリニューアルオープンした当施設は、とくにその玄関口としての機能の充実を意図していると感じた。 私たちが訪れた日は、平日だったためか訪問客数は少なかったが、土日は盛況とのことだった。美しく、ゆとりのある空間は、居心地が良かった。		
【今後、愛川町にどのように反映していくのか】 旧半原水源地跡地の活用方法として、住民の間からは「道の駅」の設置を要望する声がちらほら聞こえる。神奈川県内では「道の駅」はまだ3施設しかなく、山あいから山梨県に繋がるルートとしては情報アクセス機能を重視した道の駅には需要があると考える。 また、水源地に拘らなくとも、国道412号線沿いの公用地・準公用地の今後の展開を考えた場合、地元製品の販売拠点としては参考になる。		

会派 愛川の新時代 館山市行政視察報告書

日 時	令和7年2月7日（金） 9時30分～11時30分	館山市役所議場での写真 
視察先	千葉県館山市役所	
応対者	議長 太田浩 食のまちづくり推進課 勢見公彦課長 議会事務局 宮澤知幸局長	
テーマ	館山市の「食のまちづくり」について	

【事業の概要】

- ・温暖な気候で多種多様な農水産物が採れる館山市、食の豊かさを活かして地域の魅力アップを目指す。
- ・平成27年2月に「食のまちづくり計画」を策定。「館山は食べ物がおいしいね！」と、市民が誇れるまち、全国の人々に言ってもらえるまちを目指す。
- ・一次産業をはじめとした地域の産業振興、雇用・移住・定住・関係人口増加をねらう。
- ・地域農産物に関する人・モノ・情報などを集め、連携させるための地域活性化の拠点、食のまちづくりの中心となる施設整備が求められ、物販・加工・飲食・情報・体験の5つの基本機能に加えて、駐車場・トイレ・休憩施設等、道の駅の機能を備えた「食のまちづくり拠点施設」の整備方針を決定。

【主な施策の内容】

- ・ご当地グルメの開発（館山炙り海鮮丼・いちじく寒天・たてやま海自カレー等）
- ・地産地消の取組（館山市地産地消推進条例・マルシェ・地産地消レシピ等）
- ・館山ブランド事業、「地域に誇れる食」をコンセプトに地域内の優れた一次産業品、加工食品を「館山ブランド」として認定し、広くPRしている。
- ・市の補助事業を活用して開発された、地元農水産物を使った加工品のPR・販売会を開催。
- ・ブランド力向上に向けて、農産物ブランド力向上セミナーの開催。
- ・グルメスタンプラリーを開催し、利用促進キャンペーンを行う。
- ・館山市若手農業者交流会「たがやすわかて」を発足し、ワークショップ・BBQ大会・マルシェ出店等を通じて、歳の近い仲間と絆を作るきっかけを促している。
- ・地場産ジビエの活用・ブランド化を目指し、「館山ジビエセンター」の整備。
- ・食のまちづくり拠点施設「道の駅グリーンファーム館山」の整備。

【質疑応答】

Q：館山ジビエセンターの整備費用は。

A：既存の建物を再利用して、1,200 万円で改修をおこなった。イノシシ・シカ・キョン等を食肉加工している。売り上げは好調。

Q：鉄骨ビニールハウスの鉄骨が物納されたとのことだが、どのようにして物納されたのか。

A：企業版ふるさと納税を利用して、企業に鉄骨を物納寄付していただいた。

Q：デジタル田園都市国家構想交付金の交付までの経緯は。

A：デジタル田園都市国家構想交付金（地方創生拠点整備タイプ）を活用し、約 3 億円交付された。提出する事業計画書の作成が大変だった。

【事業の効果・所感】

道の駅グリーンファーム館山は、平成 14 年に公設卸売市場用地として用地取得したが、計画が廃止されたため、食のまちづくり拠点施設整備の民間公募を実施したが、不調に終わった。その後、令和元年 12 月に前澤友作氏より 20 億円のふるさと納税をいただき、その一部を活用して、令和 6 年 2 月にグランドオープンした。総事業費は約 7 億 6 千万円、内訳は、前澤友作館山応援基金（約 3 億 4 千万円）、デジタル田園都市国家構想交付金（約 3 億円）、その他交付税措置など（約 1 億 2 千万円）。年間売上目標は、3 億 7 千万円、年間入込目標 40 万人、達成率は 60%～70%です。

コンセプトは「体験価値の高い道の駅」として、農業や調理体験ができる道の駅です。

道の駅の整備に関しては、スモールスタート、小さく始めて徐々に大きくしていく方法で、現在は、鉄骨ビニールハウスを建設中で、イチゴを栽培予定です。

担当者からは、道の駅の入口は国道から少し入ったところだが、道の駅を目的に来てくれているので、気にしていない。近くにスーパーがあるが、道の駅オープン前より売上が減ったとは聞いていない、むしろ売上が上がったと聞いている。指定管理者と野菜の出荷者との間で、コミュニケーション不足が発生したため、出荷者との関係性は大事とのことだった。

今後の展望としては、担い手の育成、ブランド力の向上、地域内流通の推進、食のまちづくり拠点施設（道の駅）の整備が課題とのことだった。

【今後、愛川町にどのように反映していくのか】

本町でも観光・産業連携拠点づくり事業において、連携の中で考えられる施設として、物産館がある。生産者から野菜などを出荷してもらう場合には、指定管理者と生産者の両方がコミュニケーションを図ってもらい、物事が円滑に進むようにしていく必要があると思う。また、地場産ジビエの活用や地元農産物を使った加工品の開発、農産物ブランド力向上セミナーの開催など、館山市でおこなわれていることを参考にし、物産館がオープンするときには、様々な商品が提供できる体制を早いうちに考えていった方が良いと思う。

会派愛川の新時代「道の駅グリーンファーム館山」視察報告書

日 時	令和7年2月7日（金） 12時00分～13時00分		
視察先	千葉県館山市 「道の駅グリーンファーム館山」		
応対者	なし		
テーマ	市有地を活用した収入・集客について		
【テーマ「道の駅グリーンファーム館山」の概要】			
名称：グリーンファーム館山（ぐりーんふぁーむたてやま） 所在地：〒294-0012 千葉県館山市稲 274 番地 電話番号：0470-29-7015 駐車場：小型 119 台、大型：9 台、身障者用 3 台 ホームページ https://greenfarm-tateyama.com オープン1周年。南房総市内に8つ道の駅がある中で、情報発信機能を重視し、特にハイウェイオアシス「富楽里とみやま」を参考に行っている。現状は全体面積の1/3の開発のスタートで、残りは現在工事中である。			
【主な施策の内容】 約20年前に公設市場のために行政が購入した有休地の活用が当初の目的だった。こうした背景から、広域農道に面しており、国道からのアクセスは良くない。しかし、プロポーザルを検討する中で、道の駅の沿道アクセスによる有利不利は既に過去のことであり、情報の出し方で払拭できることが判ってきた。			
【事業の効果・所感】 RESASの地域経済循環マップによると、館山市は、民間消費額が地域外からの流入がとて多いのが特徴。その特徴を活かして、更に良い循環を作るという構想の元、食のまちづくり拠点施設として道の駅を位置づけた。単に「食のまちづくり」と言うところどころにでもありそうだが、「そうではないんです」ということを、行政担当課長から聞いていた。			
【今後、愛川町にどのように反映していくのか】 観光・産業連携基本構想に基づいて、旧半原水源地跡地の利活用については神奈川トヨタとの連携が模索されているが、この敷地も国道からのアクセスが悪いことから道の駅には適さないのではとの懸念が庁内では支配的である。しかし、面積的にはグリーンファーム館山とほぼ同規模であり、上記の考え方は大いに参考になると思われる。私たち愛川町も、RESAS（地域経済循環分析）の手法を取り入れるべきだと感じた。			



会派愛川の新時代 震災対策技術展 視察報告書

日 時	令和 7 年 2 月 7 日(金) 15 時～16 時	
視察先	横浜パシフィコ	
応対者	「震災対策技術展」実行委員会	
テーマ	首都直下地震、台風、ゲリラ豪雨等、各種災害対策を「防災×テクノロジー」の発信で、減災をもたらす技術を持った、約 160 社が集結した展示会	

【技術展の内容と感想】

当日は、1 時間という限られた時間であったので、防災食品展をメインに見学しました。災害時の食の備えを一層充実させるべく防災食をレベルアップさせていました。「ゆであずき」「ようかん」「リゾット」等、バラエティ豊富で味も試食してみてもおいしいと感じました。サバイバルフーズの缶は愛川町でも避難所に備蓄してあるものでした。また「ゆであずき」や「ようかん」は避難所生活が長引いた時に癒しの食べ物となる貴重な保存食です。長期保存が可能なので本町の備蓄品として入れて頂きたいと思います。

また水循環式バイオトイレや取り付け簡単な転倒防止器具等、多くの展示がありました。

